薬剤部季刊誌　１２号

くすり箱

発行
桐生厚生総合病院　薬剤部
発行責任者　田村　潤一
編集担当者　江原　晴美
ＤＩ室担当　亀岡　桐代

2009 年6月発行

第12回目のテーマは、“湿布薬の種類や効果的な貼り方など”についての紹介です。

湿布薬の種類は・・・

一口に湿布薬といっても、**冷湿布**、**温湿布**など“貼り心地”から分類したり、“成分・作用の違い”から**第一世代**、**第二世代**など、また“材質や厚さの違い”などから**パップ剤**、**プラスター剤**など…色々な分類に分けられます。

第一世代　：消炎鎮痛を目的とした成分（サリチル酸メチル等）に温感・冷感成分等を配合したもの

第二世代　：非ステロイド性消炎鎮痛薬（NSAIDs）※を主成分とする経皮吸収局所作用型の**経皮鎮痛消炎薬**

※ 詳しくは、“くすり箱　9 号”をご参照下さい。

まずは**第一世代**について紹介します。**第一世代**の中には、**冷湿布**と**温湿布**があり、使い分けのはっきりした基準などはありませんが、一般的には以下のように使われます。

ただし、使用される場合は必ず医師の指示に従ってご使用ください。

冷やすタイプの冷湿布　⇒　打ち身、捻挫、打撲、肉離れなど外傷を受けて、熱をもったり痛いなど患部に急激な炎症が起きている時に使います。

メントール、カンフルなど配合

スーッとする局所刺激成分により冷たく感じます。

当院採用薬：MS 冷シップ「タイホウ」

温めるタイプの温湿布　⇒　肩こり、腰痛など局所が冷たい時や筋肉のこわばりがあるなどの慢性的な症状に使います。

トウガラシエキスなど配合

血行改善作用があり温かく感じます。

当院採用薬：MS 温シップ「タイホウ」

次に、**第二世代**の**経皮鎮痛消炎薬**についての紹介です。

経皮鎮痛消炎薬とは・・・投与経路が異なるだけで、経口薬（飲み薬）と同様の効果が期待できます。「痛いところがあれば、痛み止めを飲んだ方がてっとり早いのでは・・・」と思われるかも知れません。ところが、経口薬は、胃腸を経て直接血液に入り、全身をめぐります。そのため、胃腸、肝臓、腎臓への負担も考えられます。

その点、**経皮鎮痛消炎薬**は、貼ったところだけに薬剤が浸透していきます。経口薬に比べ、薬物が肝臓を通過（初回貼付時）しませんので負担も少ないと考えられます。しかも、使用が簡単なうえ、筋肉など痛いところに届く薬の濃度は、**経口薬とほぼ同様で、体内で一定の薬物を持続でき、長時間の効果が期待できます**。こちらにも冷感タイプと温感タイプがあります。

ケトプロフェン、インドメタシンなどが主成分

皮膚から吸収されやすく、抗炎症作用や鎮痛効果にすぐれています。

当院採用薬：（冷感タイプ）ミルタックス、アドフィード
（温感タイプ）ラクティオンパップ

パップ剤とプラスター剤とは…

パップ剤 （cataplasm）	・ ガーゼ、不織布型 ・ 水分を多く含んだ薬効成分を布に塗布した湿布 ・ 粘着力が弱い ・ かぶれが少ない ・ 従来の湿布がこの型 ・ **当院採用薬： MS冷シップ「タイホウ」、ミルタックス、アドフィード MS温シップ「タイホウ」、ラクティオンパップ**

プラスター剤 （plaster）	・ 粘着テープ型 ・ 薄いテープ上の布に薬効成分を吸収させ、より密着性を増やしたもの ・ 粘着力が強い（はがれにくい） ・ 薄くてかさばらない ・ 関節などの可動性の高い部位等に適し、手軽に貼れる ・ **当院採用薬： ヤクバン40、モーラステープ**

上手な貼り方

貼りかえる時は、部位を少しずらしたり、2時間ほどあけて貼るようにして下さい。

冷湿布薬は炎症を鎮め冷やす目的で使われることが多く、冷蔵庫で保存しておき、冷えたものを使うとより効果的です。

腰痛や筋肉痛など慢性の痛みには体を温めてから貼ると効果的ですので、入浴後に使用するのがよいでしょう。しかし、温感湿布を使用中の時は、入浴によって皮膚が刺激されて痛いので、入浴の30分～1時間前にはがし、入浴後30分位たってから貼るようにして下さい。

かぶれやすい方は…

皮膚にガーゼを1枚おいてその上から湿布をして下さい。湿布をかえる時には、ぬるま湯でやさしく皮膚を洗浄してからよく乾かして30分～1時間位、肌を休めて下さい。自分の出した汗や体についている汚れでかぶれることがあるからです。

夏場は数時間毎に湿布をちょっとはがして、肌をきれいにしてからまた貼れば効果的です。

お風呂上りは汗をかきやすいので、体のほてりが鎮まってから貼るとよいでしょう。

副作用は…

主な副作用は、**皮膚炎**や**痒み**などの皮膚症状です。

まれに、**喘息発作（アスピリン喘息）**や**じんましんや呼吸困難などのアレルギー様症状、光線過敏症**などが起きてしまう場合もあります。少しでも気になる症状が現れたら、すぐに主治医に相談しましょう。

光線過敏症…湿布薬をはがした後でも4週間は注意をして下さい！

痛みを抑える成分の湿布薬（**経皮鎮痛消炎薬**）の中には、はがした後もその成分が少なからず残り、そこに直射日光があたると、過敏症のある方では、腫れたり、赤くなったりすることがあります。

湿布薬をはがした後、少なくとも4週間は注意が必要ですので、晴れた日だけでなく曇りの日でも濃い色の服（長袖やスラックス）やサポーターなどで、貼ったところを日光からさえぎって下さい。

次回は、“高血圧症とくすりについて”のテーマで、2009年9月発行予定です。